

日蓮大聖人御書全集

じゅうはちえんまんしょう

十八円満抄

新版
1794
ゝ
1803

じゅうはちえんまんしょう

十八円満抄

こうあん

ねん

弘安 3 年 ('80)

がつ

11 月 3 日

にち

さい

59 歳

さいれんぼう

最蓮房

にちれん

しる

日蓮これを記す。

と

い

じゅうはちえんまん

ほうもん

しゅつしよ

問うて云わく、

十八円満の法門の出处、いかん。

こた

い

みなもと

れん

いちじ

お

答えて云わく、

源、蓮の一字より起こるなり。

と

い

しよしやく

み

問うて云わく、このこと所釈にこれを見たりや。

こた

い

でんぎようだいし

しゅぜんじそうでんにつき

あ

答えて云わく、伝教大師の修禅寺相伝日記にこれ在り。

ほうもん

とうせいてんだいししゅう

おうぎ

ひ

ひ

この法門は当世天台宗の奥義なり。秘すべし、秘すべし。

と

い

じゅうはちえんまん

みようもく

問うて云わく、十八円満の名目、いかん。

こた い いち りしようえんまん に しゅぎようえんまん さん けゆう
答えて云わく、一に理性円満、二に修行円満、三に化用

えんまん し かかいえんまん ご そうそくえんまん ろく しよきようえんまん しち

円満、四に果海円満、五に相即円満、六に諸教円満、七に

いちねんえんまん はち じりえんまん く くどくえんまん じゆう しいえんまん

一念円満、八に事理円満、九に功德円満、十に諸位円満、

じゆういち しゆしえんまん じゆうに ごんじつえんまん じゆうさん しようえんまん じゆうし

十一に種子円満、十二に権実円満、十三に諸相円満、十四

ぞくたいえんまん じゆうご ないげえんまん じゆうろく かんじんえんまん じゆうしち

に俗諦円満、十五に内外円満、十六に観心円満、十七に

じゃくしようえんまん じゆうはち ふ しぎえんまん いじよう

寂照円満、十八に不思議円満已上。

と い いろいろ

問うて云わく、意いかん。

こた い でんぎようだいし しゃく い

答えて云わく、このこと伝教大師、釈して云わく、

つぎ れん ごじゆうげん れん けいんじようか ぎ な

「次に蓮の五重玄とは、蓮をば華因成果の義に名づく。蓮

な　じゅうはちえんまん　ゆえ　れん　な
の名は十八円満なるが故に蓮と名づく。

いち　りしやうえんまん　い　ばんぼう　しんによほつしやう　じつり

一に理性円満。謂わく、万法ことごとく真如法性の実理

き　じつしやう　り　ばんぼうえんまん　ゆえ　りしやう　さ　れん

に帰す。実性の理に万法円満す。故に理性を指して蓮とな

す。

に　しゆぎやうえんまん　い　うそう　むそう　にぎやう　しゆ　ばんぼう

二に修行円満。謂わく、有相・無相の二行を修して万法

えんまん　ゆえ　しゆぎやう　れん

円満す。故に修行を蓮となす。

さん　けゆうえんまん　い　しんしやう　ほんり　しよほう　いんぶん　あ

三に化用円満。謂わく、心性の本理に諸法の因分有り。

いんぶん　よ　けた　ゆう　ぐ　ゆえ　れん　な

この因分に由つて化他の用を具す。故に蓮と名づく。

し　かかいえんまん　しよほう　じしやう　たず　ほんしやう

四に果海円満。諸法の自性を尋ぬるに、ことごとく本性

す む さ さんじん じよう ほう
を捨てて無作の三身を成ず。法として無作の三身にあらざ

ることなし。故に蓮と名づく。
ゆえ れん な

ご そうそくえんまん い ほんのう じしようまつた ぼだい いったい
五に相即円満。謂わく、煩惱の自性全く菩提にして、一体

ふに ゆえ れん
不二なるが故に蓮となす。

ろく しょきようえんまん しょぶつ ないしよう ほんれん しょきよう ぐそく
六に諸教円満。諸仏の内証の本蓮に諸教を具足して、

けつげん な ゆえ
さらに闕減無きが故に。

しち いちねんえんまん い こんじんあいたい いちねん こころ お
七に一念円満。謂わく、根塵相對して一念の心起こるに、

さんぜんせけん ぐ ゆえ
三千世間を具するが故に。

はち じりえんまん いっぽう とうたい ににふじ けつげん な
八に事理円満。一法の当体、而二不二にして、闕減無く

ぐそく

ゆえ

具足するが故に。

く

くどくえんまん

い

みようほうれんげきよう

まんぎよう

くどく

ぐ

九に功德円満。謂わく、妙法蓮華經に万行の功德を具し

さんりき

しゅうのうあ

ゆえ

て、三力の勝能有るが故に。

じゅう

しよいえんまん

いっしん

てん

ろくそくえんまん

十に諸位円満。ただ一心を点ずるのみにして、六即円満

ゆえ

なるが故に。

じゅういち

しゆしえんまん

いっさいしゆじよう

しんしよう

もと

じようぶつ

十一に種子円満。一切衆生の心性に本より成仏の

しゆし

ぐ

ごんきよう

しゆしえんまんな

ゆえ

かいじようぶつどう

むね

種子を具す。権教は種子円満無きが故に、皆成仏道の旨を

と

ゆえ

れん

ぎな

説かず。故に蓮の義無し。

じゅうに

ごんじつえんまん

い

ほつけじつしよう

とき

じつ

そく

十二に権実円満。謂わく、法華実証の時は、実に即して

しかも権、権に即してしかも実、権実相即して闕減無きが故

えんまん

ほう

すで

さんじん

ぐ

ゆえ

しよぶつつね

ほう

に円満の法にして、既に三身を具するが故に諸仏常に法を

えんぜつ

演説す。

じゆうさん

しよそうえんまん

い

いちいち

そう

なか

みなはっそう

ぐ

十三に諸相円満。謂わく、一々の相の中に皆八相を具し

いっさい

しよほうつね

はっそう

とな

て、一切の諸法常に八相を唱う。

じゆうし

ぞくたいえんまん

い

じっかい

ひやつかいななしさんぜん

ほんしろう

十四に俗諦円満。謂わく、十界・百界乃至三千の本性は、

じようじゆうふめつ

ほんい

どう

とうたいそくり

ゆえ

常住不滅なり。本位を動ぜず、当体即理なるが故に。

じゆうご

ないげえんまん

い

ひじよう

げき

うち

ろくじよう

ぐ

十五に内外円満。謂わく、非情の外器に内の六情を具す。

うじようしゆ

なか

ひじよう

ぐ

よきよう

ないげえんまん

と

有情数の中にまた非情を具す。余教は内外円満を説かざる

が故に草木成仏すること能わず。ゆえ そうもくじようぶつ あた 草木非成仏の故にまた蓮れん

と名づけず。な

十六に観心円満。じゅうろく かんじんえんまん ろくじん ろくき つね かんじん そう 六塵・六作、常に観心の相にして、さ

らに余義にあらざるが故に。よぎ ゆえ

十七に寂照円満。じゅうしち じゃくしようにんまん もん い ほっしようにやくねん し 文に云わく『法性寂然なるを止と

名づけ、寂にして常に照らすを観と名づく』。な じゃく つね て かん な

十八に不思議円満。じゅうはち ふしぎえんまん い こま しよほう じしやう たず 謂わく、細かに諸法の自性を尋ぬる

に、非有非無にして諸の情量を絶し、また、三千・三觀、ひう ひむ もろもろ じようりやう ぜつ さんぜん さんがん

ならびに寂照等の相無し。じゃくしやうとう そうな だいぶん じんぎほんらい ふしぎ 大分の深義本来不思議なるが

ゆえ な れん
故に名づけて蓮となすなり。

じゅうはちえんまん ぎ くわ きょうい あん
この十八円満の義をもつて委しく経意を案ずるに、

こんきよう しょうのう かんじん ほんぎ まこと れん ぎ よ
今経の勝能ならびに観心の本義、良に蓮の義に由る。

にじよう あくにん そうもくとう じようぶつ くおんじんてんとう れん とく
二乗・悪人・草木等の成仏ならびに久遠塵点等は、蓮の徳

はな よぎ あ
を離れては余義有ることなし。

ぎす でん い げんし しょうけつ たず じゅうくえんまん
座主の伝に云わく『玄旨の正決を尋ぬるに、十九円満を

れん な どうたいえんまん くわ どうたいえんまん
もつて蓮と名づく。いわゆる当体円満を加う。当体円満と

どうたいれんげ い しょう じしょうしやうじよう ぜんじよく
は当体蓮華なり。謂わく、諸法の自性清浄にして染濁を

はな もと れん な いっきよう せつ よ いっさい
離るるを、本より蓮と名づく。一経の説に依るに、一切

しゆじよう むね あいだ はちよう れんげあ なんし うえ む によにん
衆生の心の間に八葉の蓮華有り。男子は上に向かい、女人

した む じようぶつ ご いた によにん
は下に向かう。成仏の期に至れば、たとい女人なりといえ

むね あいだ れんげすみ かえ うえ む
ども、心の間の蓮華速やかに還つて上に向かう。しかるに、

いま れん ぶつ い あ とき ほんしようしようじよう とうたい れん な
今の蓮、仏意に在るの時は、本性清浄の当体の蓮と成る。

きじよう つ れんげ ひゆ れん な
もし機情に就かば、この蓮華、譬喩の蓮と成る。』

つぎ れん たい たい たしゆあ
次に蓮の体とは、体において多種有り。

いち とくたい れん い ほんしよう さんたい れん たい
一には徳体の蓮。謂わく、本性の三諦を蓮の体となす。

に ほんしよう れん たい さんぜん しょう もと このかたとうたいふどう
二には本性の蓮の体。三千の諸法、本より已来当体不動

れん たい
なるを、蓮の体となす。

三には果海真善の体。一切諸法は本これ三身にして

さん かいしんぜん たい いっさいしよほう もと さんじん

じやつこうど じゅう いっぽう さんじん はな

寂光土に住す。たとい一法なりといえども、三身を離れざ

ゆえ さんじん か れん たい

るが故に、三身の果をもつて蓮の体となす。

し だいぶんしんによ たい い ふへん ずいえん にしゆ しんによ

四には大分真如の体。謂わく、不変・随縁の二種の真如を

しようぶん しんによ な ほん じやく じやく しようとう そう

ならびに証分の真如と名づく。本・迹、寂・照等の相を

わ しよほう じしやうふ か しぎ れん たい

分かたず、諸法の自性不可思議なるを蓮の体となす。

つぎ れん しゅう かかい うえ いんが かしやうい ろく

次に蓮の宗とは、果海の上の因果なり。和尚云わく『六

そく じい みやうほうれんげきやう ご じ なか まさ れん じ あ

即の次位は、妙法蓮華經の五字の中には正しく蓮の字に在

れんもん ごじゆうげん なか まさ れん じ お ゆえん

り。蓮門の五重玄の中には正しく蓮の字より起こる。』所以

はいかん。理即は本性に名づく。本性の真如、果性円満の
ゆえ りそく れん な かかいほんしょう げ ぎよう しょう くらい じゅう
故に理即を蓮と名づけ、果海本性の解・行・証の位に住
するかい じい な
するを果海の次位と名づく。

智者大師、自解仏乗の内証をもつて明らかに経旨を見、
ちしやだいし じ げぶつじよう ないしょう あき きようし み

蓮の義において六即の次位を建立す。故に文に云わく『こ
れmm ぎ ろくそく じい こんりゆう ゆえ もん い

の六即の義は一家より起これり』。しかるに、始覚の理に依
ろくそく ぎ いっけ お しかく り よ

つて在纏真如を指して理即となし、妙覚の証理を出纏
ざいてんしんによ ささ りそく みようかく しょうり しゅつてん

真如と名づく。正しく出纏のために諸の万行を修する
しんによ な まさ しゅつてん もろもろ まんぎよう しゅ

が故に、法性の理の上の因果なり。故にまた蓮の宗と名づ
ゆえ ほつしょう り うえ いんが ゆえ れん しゅう な

く。

れん むつ

しようのうあ

いち

じしようしようじよう

ないじよく

蓮に六つの勝能有り。一には、自性清浄にして泥濁に

そ

りそく

に

はな

うてな

み

さんしゆ

ぐそく

げん

染まらず〈理即〉。二には、華・台・実の三種、具足して滅

みようじそく

しよほうすなわ

さんたい

げりよう

ゆえ

ずることなし〈名字即〉。諸法即ちこれ三諦と解了するが故

さん

はじ

たね

み

じよう

いた

はな

に〉。三には、初め種子より実を成ずるに至るまで、華・

うてな

み

さんしゆ

そうぞく

だん

かんぎようそく

ねんねんそうぞく

台・実の三種、相續して断ぜず〈觀行即〉。念々相續して、

しゆ

はいな

ゆえ

し

はなびら

なか

あ

みじゆく

み

修に廃無きが故に〉。四には、華葉の中に在つて、未熟の実、

まこと

み

に

そうじそく

ご

はなひら

はちすげん

真の実に似たり〈相似即〉。五には、華開き、蓮現ず

ぶんしんそく

ろく

はなお

はちすじよう

くきようそく

ぎ

〈分真即〉。六には、華落ちて蓮成ず〈究竟即〉。この義を

もつての故に六即の深義は、源、蓮の字より出でたり。

つぎ れん ゆう ろくそく えんまん とく よ つね けゆう ほどこ
次に蓮の用とは、六即円満の徳に由つて常に化用を施す

ゆえ
が故なり。

つぎ れん きよう ほんぬ さんじん かかい れんしやう じゆう
次に蓮の教とは、本有の三身たる果海の蓮性に住して

つね じやうほう と はつそう じやうどう しく じやうり かしやう
常に浄法を説き、八相成道し、四句成利す。和尚いわく

しやうどう はつそう むさ さんじん ゆえ しく じやうどう
『証道の八相は無作の三身なるが故に四句の成道は

れんきやう ところ あ むさ さんじん さ ほんがく れん
蓮教の処に在り。ただ無作の三身を指して本覚の蓮とな

す。この本蓮に住して常に八相を唱え、常に四句の成道を

な ゆえ いじやう
作すが故なり』と「已上。

しゆぜんじそうでんにつき

み

みようほうれんげきよう

ごじ

修禅寺相伝日記これを見るに、妙法蓮華經の五字におい

おのおのごじゅうげん

れん

じ

ごじゅうげんぎ

よ

て各々五重玄なりへ蓮の字の五重玄義かくのごとし。余は

りやく

これを略す。

にちれんあん

い

そうでん

ぎ

ばんぼう

日蓮案じて云わく、この相伝の義のごとくんば、万法の

こんげん

いっしんさんがん

いちねんさんぜん

さんたい

ろくそく

きようち

えんゆう

ほんじやく

根源、一心三觀、一念三千、三諦、六即、境智の円融、本迹

しよせん

みなもと

れん

いちじ

お

うんぬん

の所詮、源、蓮の一字より起こるものなり云々。

と

い

そうせつ

ごじゅうげん

問うて云わく、総説の五重玄とはいかん。

こた

い

答えて云わく、

そうせつ

ごじゅうげん

みようほうれんげきよう

ごじすなわ

ごじゅうげん

「総説の五重玄とは、妙法蓮華經の五字即ち五重玄な

り。妙は名、法は体、蓮は宗、華是用、経は教なり。
また総説の五重玄に二種有り。一には仏意の五重玄、二に
は機情の五重玄なり。

仏意の五重玄とは、諸仏の内証に五眼の体を具す。即ち

妙法蓮華経の五字なり。仏眼は妙、法眼は法、慧眼は蓮、

天眼は華、肉眼は経なり。妙は不思議に名づくるが故に

真空冥寂の仏眼なり。法は分別に名づく。法眼は仮なり、

分別の形なり。慧眼は空なり、果体の蓮なり。華は用なる

が故に天眼に名づく。神通化用なり。経は破迷の義在り。

めい しよたい ゆえ にくげん な ぶつち ないしよう

迷をもつて所対となすが故に肉眼と名づく。仏智の内証に

ごげん ぐ すなわ ごじ ごじ ごじ ぶつ

五眼を具す。即ち五字なり。五字また五重玄なり。故に仏

い ごじゆうげん な ごげんそくごち ほつかいたいしようち ぶつ

意の五重玄と名づく。また五眼即五智なり。法界体性智は仏

げん だいえんきようち ほうげん びようどうしようち えげん みようかんざつち てんげん

眼、大円鏡智は法眼、平等性智は慧眼、妙觀察智は天眼、

じようしよさち にくげん

成所作智は肉眼なり。

と いっけ ごち た

問う。一家には五智を立つや。

こた すで くしき た ゆえ ごち た さき ごしき

答う。既に九識を立つ。故に五智を立つべし。前の五識は

じようしよさち だいろくしき みようかんざつち だいしちしき びようどうしようち だいはちしき

成所作智、第六識は妙觀察智、第七識は平等性智、第八識

だいえんきようち だいくしき ほつかいたいしようち

は大円鏡智、第九識は法界体性智なり。

つぎ きじょう ごじゅうげん

次に機情の五重玄とは、機きのために説とくところの

みようほうれんげきよう すなわ

きじょう ごじゅうげん

しゅだい ごじ

妙法蓮華経は即ちこれ機情の五重玄なり。首題の五字に

ごじゅう いっしんさんがんあ

ついて五重の一心三観有り。

でん い

伝に云わく、

みよう ふしぎ いっしんさんがん

てんしんどくろう ゆえ ふしぎ

妙 不思議の一心三観 天真独朗の故に不思議なり。

ほう えんゆう いっしんさんがん

りしやうえんゆう

そう くか じよう

法 円融の一心三観 理性円融なり。総じて九箇を成

ず。

れん とくい いっしんさんがん

かい

蓮 得意の一心三観 果位なり。

け ふくそ いっしんさんがん ほんがく しゆぎよう

華 複疎の一心三観 本覚の修行なり。

経 易解の一心三観

教談なり。

玄文の第二にこの五重を挙ぐ。文に随つて解すべし。

不思議の一心三観とは、智者己証の法体、理非造作の本有

の分なり。三諦の名相無き中において、強いて名相をも

つて説いて不思議と名づく。

円融とは、理性法界の処に、本より已来、三諦の理有り。

互いに円融して九箇を成ず。

得意とは、不思議と円融との三観は凡心の及ぶところに

あらず。ただ聖智の自受用の徳をもつてのみ量知すべきが

ゆえ とうい な
故に、得意と名づく。

ふくそ むさ さんたい いっさいほう へん ほんしようじようじゆう
複疎とは、無作の三諦は一切法に遍して本性常住なり。

りしよう えんゆう おな ゆえ ふくそ な
理性の円融に同じからず。故に複疎と名づく。

いげ さんたいえんゆうとう ぎし がた ゆえ しだい
易解とは、三諦円融等の義知り難きが故に、しばらく次第

ふ ぎ ふんべつ ゆえ いげ な ふもん
に附してその義を分別す。故に易解と名づく。これを附文の

ごじゆう な
五重と名づく。

つぎ ほんい よ ごじゆう さんがん あ いち さんがんいっしん
次に本意に依つてまた五重の三観有り。一に三観一心

じやくもん い き に いっしんさんがん しょうもん い き さん
〈寂門に入るの機〉。二に一心三観〈照門に入るの機〉。三

じゆうかげん いっしんさんがん じようき あ ちしき いっさいほう みな
に住果還の一心三観。上機有つて知識の『一切法は皆これ

ぶつぼう

と

き

そく

しんり

かい

しん

い

仏法なり』と説くを聞くに即して真理を開す。真に入つて

いご かん きわ

いっしんさんがん しゅ

し い かぎよういん

已後、観を極めんがために一心三観を修す。四に為果行因

いっしんさんがん

い

かいくきよう

みようか

き

か え

の一心三観。謂わく、果位究竟の妙果を聞いてこの果を得ん

しゅじゅ

さんがん

しゅ

ご

ふほう

いっしんさんがん

ごじはつきよう

がために種々の三観を修す。五に付法の一心三観。五時八教

とう しゅじゅ

きようもん

き

きようぎ

こころ

い

等の種々の教門を聞いて、この教義をもつて心に入れて

かん しゅ

ゆえ

ふほう

な

観を修するが故に、付法と名づく。

さんげい

とうちゆう

ことば

りゆうぎよう

そう

さず

「山家云わくへ塔中の言なり」また立行の相を授く。

さんぜん さんがん

みようぎよう

しゅ

げぎよう

せいび

よ

ふか

じしようもん

三千・三観の妙行を修し、解行の精微に由つて深く自証門

い

われ

なんじ

しようそう

りよう

ほっししようじやくねん

し

に入る。我、汝が証相を領するに法性寂然なるを止と

な じゃく つね て かん な
名づけ、寂にして常に照らすを觀と名づく』と。

と い てんしんどくろう しかん とき いちねんさんぜん いっしんさんがん
「問うて云わく、天真独朗の止觀の時、一念三千・一心三觀

ぎ た
の義を立つや。

こた い りようし でんふどう ざすい てんしんどくろう
答えて云わく、両師の伝不同なり。座主云わく『天真独朗

いちねんさんぜん かん さんげしい いちねんさんぜん
とは、一念三千の觀これなり。山家師云わく、一念三千し

しなん いっしん さんぜん びようりゆう
かも指南となす。一念三千とは、一心より三千を生ずるに

いっしん さんぜん ぐ
もあらず、一心に三千を具するにもあらず、並立にもあ

しだい ゆえ りひぞうさ な
らず、次第にもあらず。故に、理非造作と名づく』。

かしようい てんしんどくろう たしゅあ ないし
和尚云わく『天真独朗においてもまた多種有り。乃至、

しやくちゆう

あ

ふへんしんによ

てんしん

迹中に明かすところの不変真如もまた天真なり。ただし、

だいいしほんい

てんしんどくろう

さんぜん

さんがん

そう

ほろ

いっしん

大師本意の天真独朗とは、三千・三観の相を亡ぼし、一心・

いちねん

ぎ

ぜつ

とき

げな

ぎょうな

きよう

ぎよう

しよう

一念の義を絶す。この時は解無く、行無し。教・行・証

さんか

しだい

ふ

とき

ぎようもん

いちねんさんぜん

かん

の三箇の次第を経るの時、行門において一念三千の観を

こんりゆう

ゆえ

じつしよう

だいいち

ところ

はじ

かんぼう

あ

建立す。故に十章の第七の処において始めて観法を明か

いんがかいきゆう

ところ

す。これ因果階級の意なり」と。

だいいしないうしよう

でん

なか

だいいさん

しかん

でんでん

ぎな

「大師内証の伝の中に『第三の止観には伝転の義無し』

うんぬん

ゆえ

し

しようぶん

しかん

べつぼう

つた

云々。故に知んぬ、証分の止観は別法を伝えざることを。

いま

しかん

しじゆう

ろく

しよじ

みな

きよう

ぎよう

今、止観の始終に録するところの諸事は、皆これ教・行の

おさ

じつしよう

ぶん

かいげんふしゅう

げんし

撰むるところにして、実証の分にあらず。開元符州の玄師

そうでん

い

ことば

つた

とき

ぎよう

しよう

の相伝に云わく『言をもつてこれを伝うる時は、行・証

とも

きよう

な

こころ

かん

とき

きよう

しよう

共に教と成り、心をもつてこれを観ずる時は、教・証は

ぎよう

たい

な

しょう

つた

とき

きよう

ぎよう

行の体と成る。証をもつてこれを伝うる時は、教・行ま

ふ

かし

ぎ

こうがく

ことば

こころ

とど

ぼうしつ

た不可思議なり。後学、この語に意を留めて、さらに忘失

しゅう

ほんい

りつきよう

がんし

することなかれ。あたかもこの宗の本意、立教の元旨な

かしよう

てんげん

ほんぎ

みなもと

り。和尚の貞元の本義、源これより出でたるなり。』

と

い

てんしんどくろう

ほう

めつご

とき

問うて云わく、天真独朗の法、滅後においていずれの時に

る

ふ

か流布せしむべきや。

こた い ぞうほう
答えて云わく、像法において弘通すべきなり。

と い まっぼう る ふ ほう みようもく
問うて云わく、末法において流布の法の名目いかん。

こた い にちれん こしんそうじよう ひほう こた あらわ
答えて云わく、日蓮が己心相承の秘法、この答えに顕す

べきなり。いわゆる南無妙法蓮華經これなり。

と い しょうもん
問うて云わく、証文いかん。

こた い じんりきほん い とき ほとけ じようぎようとう
答えて云わく、神力品に云わく「その時、仏は上行等

の菩薩に告げたまわく、要をもつてこれを言わば乃至宣示

けんぜつ うんぬん てんだいだいしい とき ほとけ じようぎよう つ
顕説す」云々。天台大師云わく『その時、仏は上行に告

げたまわく』より下は、第三に結要付嘱なり。また云わ

きようちゆう　ようせつ　よう　しじ　あ　そう　いつきよう　けつ

く「経中の要説、要は四事に在り。総じて一経を結する

よつ　すうへい　と　じゆよ

に、ただ四つあるのみ。その枢柄を撮つて、これを授与す」。

と　いま　もん　じようぎようぼさつとう　じゆよ　もん

問うて云わく、今の文は上行菩薩等に授与する文なり。

なんじ　なに　ゆえ　こしんそうじよう　ひほう　い

汝、何が故ぞ己心相承の秘法と云うや。

こた　い　じようぎようぼさつ　ぐつう　たも　ひほう　にちれん

答えて云わく、上行菩薩の弘通し給うべき秘法を日蓮

さきだ　ひろ　み　あ　こころ　じようぎよう

先立つてこれを弘む。身に当たるの意にあらずや。上行

ぼさつ　だいかん　いちぶん

菩薩の代官の一分なり。

せん　まつほう　い　てんしんどくろう　ほうもんむやく

詮ずるところ、末法に入つて天真独朗の法門無益なり。

じよぎよう　もち　しょうぎよう　なんみようほうれんげきよう

助行には用いるべきなり。正行にはただ南無妙法蓮華経

でんぎようだいし

てんだいだいし

しやか

しんじゆん

のみなり。

伝教大師云わく

「天台大師は釈迦に信順し

ほつけしゆう

たす

しんたん

ふよう

えいざん

いっけ

てんだい

そうじよう

法華宗を助けて震旦に敷揚し、

叡山の一家は天台に相承し

ほつけしゆう

たす

にほん

ぐつう

法華宗を助けて日本に弘通す」。

いま

にちれん

とうちゆうそうじよう

なんみようほうれんげきよう

しちじ

まつぼう

今、日蓮は、塔中相承の南無妙法蓮華經の七字を、末法

とき

にほんこく

ぐつう

じこくそうおう

ぶつぼう

の時、日本国に弘通す。これあに時国相応の仏法にあらず

まつぼう

い

てんしんどくろう

ほう

ひろ

しようぎよう

や。末法に入つて天真独朗の法を弘めて正行となさんの

もの

かなら

むけんだいじよう

お

うたが

者は、必ず無間大城に堕ちんこと疑いなし。

きへん

としごころ

ごんしゆう

す

にちれん

でし

な

たも

しんじつ

貴辺、年来の權宗を捨てて日蓮が弟子と成り給う。真実、

じこくそうおう

ちじん

そう

よ

でしとう

わ

しやうり

時国相応の智人なり。総じて予が弟子等は、我がごとく正理

しゆぎよう

たま

ちしや

がくしよう

み

じごく

お

を修行し給え。智者・学匠の身となりても、地獄に堕ち

なん

せん

あ

せん

ときどきねんねん

ては何の詮か有るべき。詮ずるところ、時々念々に

なんみようほうれんげきよう

とな

南無妙法蓮華經と唱うべし。

かみ

あ

ほうもん

ござんち

か

上に挙ぐるところの法門は、御存知たりといえども、書き

まい

そうろう

じゅうはちえんまんとう

ほうもん

よ

よ

あん

たも

進らせ候なり。十八円満等の法門、能く能く案じ給うべ

とうたいれんげ

そうじようとう

にちれん

こしよう

ほうもんとう

さきざき

し。ならびに当体蓮華の相承等、日蓮が己証の法門等、前々

か

まい

くわ

しゆぜんじそうでんにつき

に書き進らせしがごとく、委しくは修禅寺相伝日記のごと

てんだいしゆう

おうぎ

す

いつしんさんがん

いちねん

し。天台宗の奥義これに過ぐべからざるか。一心三觀・一念

さんぜん

ごくり

みようほうれんげきよう

いちごん

い

ほうしつ

三千の極理は、妙法蓮華經の一言を出でず。あえて忘失す

ぼうしつ

でんぎようだいしい

ることなかれ、あえて忘失することなかれ。伝教大師云わ

かしよう　じひあ

いっしんさんがん　いちごん　った

げんしでん

く「和尚、慈悲有つて、一心三觀を一言に伝う」。玄旨伝に

い　いちごん　みようし　いつきよう　げんぎ　うんぬん

云わく「一言の妙旨、一教の玄義」云々。

じゆりようほん

い

みずか

ねん　な

なに

寿量品に云わく「つねに自らこの念を作す。何をもつ

しゆじよう

むじようどう

い

すみ

ぶつしん

じようじゆ

てか衆生をして、無上道に入り、速やかに仏身を成就す

え

うんぬん

みずか

ねん

な

ることを得しめんと」云々。「つねに自らこの念を作す」

ねん

いちねんさんぜん

しようぶつほんぬ

いちねん

ひ

の「念」とは、一念三千、生仏本有の一念なり。秘すべし、

きようきようきんげん

秘すべし。恐々謹言。

こうあんさんねんじゆういちがつみつか

にちれん

かおう

弘安三年十一月三日

日蓮

花押

さいれんぼう
最蓮房にこれを送る。
おく